

偶然の出会いにみられる対面会話開始部の様相

岡村 佳奈(東京大学大学院生)

1. はじめに

会話の最もはじめに位置する開始部は、対人関係を円満にし、円滑に話を進めるのに重要な役割を果たすと考えられる。

これまで開始部に関しては、Hopper (1992) など電話会話を対象にした会話分析の研究が多くなされ、汎言語的に「呼び出し(電話のベル)—応答」→「自己提示—認定」→「挨拶(Hi)—挨拶(Hi)」→「挨拶表現(How are you?)—応答(Fine)」の4つの隣接ペア¹で構成されていることが明らかにされてきた。また、対面会話の開始部については、実際の対話を分析した研究ではないものの、「間投詞」→「呼称」→「あいさつ語」→「実質的表現」で構成されていると述べた長谷川(2001)などを通して電話会話と似たようないくつかの連鎖によって成り立っていることが言及されている。

このように開始部の研究はある程度蓄積されてきたが、話し手同士の対人関係や、会話開始時におかれた状況などの変数によって、開始部の構成やその中にみられる特徴に差が生じることが予想されるのにもかかわらず、そのような点に焦点を当てて分析したものは少ない。

本研究では、様々に分類される変数の中でも特に偶然の出会いに注目し、日本語母語話者同士が偶然に出会った場面でのように会話を開始するのか、その様相を考察することを目的とする。

2. 調査の概要

2016年10月から2017年3月にかけて、同性および同年齢同士の20代の日本語母語話者を対象にロールプレイ調査を2人1組で実施し、その会話内容を録音した後、宇佐美(2015)を基に文字化を行った。ロールプレイ調査で示した状況は以下の通りであり、4つの状況で親しい友人、もしくは親しくない友人と出会ったと仮定して会話を始めた後、3分程度雑談するよう被験者たちに依頼した。

状況1: 9時頃、毎日のように顔を合わせる親しい/親しくない友人と学校/職場で出会ったとき

状況2: 13時頃、3か月間会わなかった親しい/親しくない友人と学校/職場で久しぶりに出会ったとき

状況3: 17時頃、1週間会わなかった親しい/親しくない友人と新宿で偶然出会ったとき

状況4: 20時頃、毎日のように顔を合わせる親しい/親しくない友人と新宿で偶然であったとき

この4つは、出会った時刻に違いがあるほか、①日常的な出会いか否か²、②久しぶりの出会いか否かという2つの尺度の組み合わせによって、状況1が日常的に出会ったとき、状況2が日常的かつ久しぶりに出会ったとき、状況3が偶然かつ久しぶりに出会ったとき、状況4が偶然に出会ったときという設定になっている。

このうち本研究では、偶然での出会いにおける開始部に焦点を当てているため、状況3と状況4で収集された各32談話(女性:20談話、男性:12談話)、計64談話を主な分析対象とする。ただし、日常的な出会いである状況1や2と比較をしなければ得られない考察もあると考えたため、状況1と2を分析した岡村(2018)の結果を一部参照することにした。

なお、本調査では前述したように相手との親疎別に調査を行ったが、自然談話にできるだけ近似した談話を収集するため、親しい友人同士のロールプレイは実際に親しい友人同士で行い、親しくない友人同士のロールプレイは初対面の被験者たちに5分程度の自由会話をしてもらった後、自分たちを「親しくない友人」だとみなし行うよう指示した。

¹ Schegloff & Sacks(1973)によれば、隣接ペアとは、「質問—応答」「挨拶—挨拶」のような対をなす行為の連鎖のことであり、(1) 2つの発話からなる、(2) 2つの発話は隣接した位置にみられる、(3) 別の話し手によってそれぞれの発話が産出される、(4) 第一成分が第二成分に先行する、(5) 第一成分はある特定の第二成分を引き出す、という5つの特徴を持っている。

² ここでいう「日常的な出会い」とは、他学生との学校での出会いや同僚との職場での出会いなど、普段からよく会っている人同士の予測可能な出会いを指す。

3. 分析結果

3.1 全体的な構造

調査の結果、偶然の出会いにおける開始部は、談話例1のように「認識—認識」→「挨拶—挨拶」→「挨拶表現—応答」の3つの隣接ペアで構成されており、先行研究における指摘と非常に類似していることがわかった。

【談話例1 状況4・親しい友人同士】

J32: お。 《認識》
 J30: おう&, 《認識》
 J30: <お疲れ>{<}。 《挨拶》
 J32: <お疲れ>{<}さまです。 《挨拶》
 J30: あれ?どしたの?。 《挨拶表現》
 J32: うん、ちょっとあの一、プレゼント買いに。 《応答》

【談話例2 状況3・親しい友人同士】

J26: あ&, 《認識》
 J26: なんでいんの?。 《認識》
 J27: うわー<二人で笑い>。 《認識》
 J26: え、<なにしにきたの?>{<}。 《挨拶表現》
 J27: <久しぶり>{<}。 《挨拶》
 J26: 久しぶり。 《挨拶》
 J27: えっとね、プレゼント買いにきた。 《応答》

収集された談話の中にはこの順序が逆になっているようにみえる例も数件みられたが、そのような例も順序が完全に入れ替わっているのではなく、談話例2のように「挨拶表現—応答」の間に「挨拶—挨拶」が挿入されているだけであった。この例では、「なんでいんの?」「なにしにきたの?」と言われた J27 がそれに対して答える前に挨拶をしているが、「挨拶—挨拶」が「挨拶表現—応答」に先行すべきだという考えがあったからこそそのような振る舞いをみせたのだろう。もしそのような前提が話者の中になかったならば、挨拶表現に答えてから挨拶をすることも可能だが、そのような談話例は1例もなかったため、やはり開始部の基本的な構造は前述のとおりだと判断される。

3.2 「認識—認識」

「認識—認識」は、相手が既知の人だということを確認し、相手に自分の存在を知らしめる部分である。

まず、「認識—認識」の第一成分のみを分析したところ、「あ、あー」「あ」などのア形感嘆詞、「おう」「おー」などのオ形感嘆詞のほか、偶然の出会いに対する驚きなどの感情を表すと考えられる「あれ?」「え、あれー?」などアレが含まれるアレ形感嘆詞が状況にかかわらず多用されることが明らかになった。

<表1> 「認識—認識」の第一成分

状況3	「あ、あー」「あ」「あー」	10
	「お」「お、呼称」	8
	「あれ?」「あれ?呼称」「あ、あれ?」「え、あれー?」	6
	「え」	3
	その他	4
	認識なし	1
状況4	「あー」「あ」「あ、呼称」	10
	「おう」「おう、呼称」「お」「おー」	10
	「あれ?」「あ、あれ?」「あれ、呼称」	5
	「え」	2
	その他	3
	認識なし	2

【談話例3 状況3・親しくない友人同士】

→J1: <あれ?>{<},,
 →J2: <あ>{<}、あれ? <あー、えー、「J1 性」さん>{<}。
 J1: <あ、お久しぶり>{<}です、えー。
 J2: え、お久しぶりです。

【談話例4 状況4:親しい友人同士】

→J5: あ,,
 →J8: あー、「J5 名」ちゃん<二人で笑い>。
 →J5: 「J8 名」ちゃん<笑い>。
 J8: バイトでしょ?。

次に、第二成分まで含めて分析した結果、第一成分と第二成分で同一、あるいは類似した発話形式を用いたものが状況3で12件、状況4で16件あり、談話例3や談話例4のようにオウム返しが好まれる傾向にある様子が見えてきた。

3.3 「挨拶—挨拶」

Hopper (1992:60)によれば、挨拶とは「相手を認識し、相手との出会いが受け入れ可能であることを示すサイン」として交わされるものである。どのようなことばを挨拶の範疇に入れるかに関しては研究者ごとに見解の違いがあるだろうが、

本研究では小林・澤村(2014)に従い、挨拶の専用形式、つまり人に出会ったり別れたりするという挨拶する場面でしか使えない「こんにちは」のようなことばのみを挨拶と見なすことにした。

このような定義に基づき「挨拶—挨拶」の第一成分をみた結果、挨拶が観察されなかった例が状況3では12件、状況4では17件あり、挨拶の省略が30~50%と頻繁に行われていることがわかった。岡村(2018)によれば、状況1と2では挨拶の省略が親しい関係であってもほとんど見られなかったため、これは偶然の出会いにみられる特徴であり、予期せぬ出会いに対する驚きなどが挨拶の省略につながったと考えるのが妥当であろう。

使用された挨拶の類型は、状況3ではヒサシブリ類、状況4ではオツカレ類を単独、もしくは併用して用いる比率が高く、「こんにちは」「こんばんは」のような挨拶はほとんど用いられていなかった。ロールプレイ調査で出会いの時刻として設定した夕方から夜にかけての規範的な挨拶は「こんにちは」「こんばんは」であるが、羅聖淑(2010)によれば、これらの挨拶は若年層では目上の人だけに用いられ、友人同士ではあまり用いられないという。本研究で研究対象としたのが20代被験者による同年齢同士の会話であったため、これらの挨拶が観察されなかったものと推測される。

<表2> 「挨拶—挨拶」の第一成分

状況3	「お久しぶりです」「久しぶり」「久しぶり + やっほー」	12
	「お疲れ様です」「お疲れ」	6
	「どうも」「やっほー」	(各1)2
	挨拶なし	12
状況4	「お疲れ」「お疲れ様です」「お疲れ + さっきぶり」	7
	「どうも」「やっほー」「こんばんは」	(各2)6
	「おはよう」「さっきぶりー」	(各1)2
	挨拶なし	17

また、第二成分まで含めて分析したところ、第一成分と第二成分で同一、もしくは類似した発話形式が用いられた談話が状況3では14件、状況4では10件あった。全体数はそれほど多くないが、状況3では12件、状況4では17件でそもそも挨拶自体が観察されなかったことを鑑みると、オウム返しはかなり好まれているといえるだろう。実際の談話例をみても、「さっきぶりー」という使用頻度の低い挨拶にも「さっきぶり」で返していたり(談話例5)、J1の「こんばんはー」を聞いたJ2が「こんな」から始まることばを言おうとしていたのに発話をやめて「こんばんは」と返した(談話例6)ことから日本語母語話者がオウム返しを志向していることがわかる。

【談話例5 状況4・親しい友人同士】

J1: あれ?
 J3: え?
 J1: え?あれ?どうしたの?
 →J3: うーん、なんかさっきぶりー<二人で笑い>。
 →J1: さっきぶり<笑い>。

【談話例6 状況4・親しくない友人同士】

J1: あれ?
 J2: あれ?あー。
 →J1: こんばんは<笑い>>>{<>。
 →J2: <こんな>{<>、こんばんは。

3.4 「挨拶表現—応答」

「挨拶表現—応答」は、深い発話内容を含まない質問や表現が交わされる部分である(Hopper, 1992)。開始部の最後ではこのような「挨拶表現—応答」がいくつか交わされた後、主要部に移行していくと考えられるが、ロールプレイ調査での話題を雑談としたためか主要部移行へのサインとなる談話標識が本研究ではみられず、どこまでが開始部か判断するのが困難だった。そのため、「挨拶—挨拶」の後に観察された直後に観察された1つ目の隣接ペアのみを「挨拶表現—応答」とみなし、分析することにした³。本研究で収集された挨拶表現を分類した類型は(1) 行動や状況への質問・描写、(2) 接触に関する言及、(3) 感情の表出、(4) その他、の4つである。

分析の結果、「どうしたの?」「なにしてんの?」のようにどのような目的で偶然に出会ったその場所に来たのかをたずねる「行動や状況への質問・描写」や、「こんなところで会うなんて」「よく会うね」など偶然に出会ったことや頻繁に会うことについて述べる「接触に関する言及」が多く用いられることが明らかになった。

³ 第一成分と第二成分が両方生起されたものに限り「挨拶表現—応答」とみなした。したがって「挨拶—挨拶」の直後に何らかのことばが発せられたのに、それに対応する第2成分が産出されなかった場合は、分析の対象から除外した。

<表3> 「挨拶表現—応答」の第一成分

状況3	行動・状況への質問・描写	26
	接触に関する言及	3
	感情の表出	2
	その他	1
状況4	行動・状況への質問・描写	20
	接触に関する言及	7
	感情の表出	3
	その他	2

【談話例7 状況4・親しくない友人同士】

J28: あ、<「J25 名」やん>{<}。
 J25: <あれ?>{<}&,
 →J25: どうしたん?。(1つ目の質問)
 →J28: えー、いつから?何で?。(2つめの質問)
 J25: いつから?<二人で笑い>。
 →J25: 今来たところ。
 <中略>
 →J25: どしたん?。(1つ目の質問)
 J26: え、本を買いに来た。

このうち「行動や状況への質問・描写」を用いた談話の中には、「どうしたん?」の後に「いつから?なんで?」を産出した談話例7のように、1つ目の質問に2つ目の質問で返している例が状況3では8件、状況4では6件みられた。このような様相を呈した理由には、質問形式ではあっても質問の機能はないとみなされたため、あるいは驚きを示すため、などが挙げられるだろう。また、このような談話例のもう1つの特徴は、2つ目の質問への応答が1つ目の質問のそれに先行するという点であった。例えばこの例では、「いつから?なんで?」という2つ目の質問に応答がなされた後、「どうしてそこに来たのか」についての会話がしばらく続く。そして、1つ目の質問が再び投げかけられてから、ようやくそれへの応答が観察されたが、1つ目の質問に対する答えが会話中まったく産出されずに会話が終了する例も数件みられた。

最後に、「挨拶表現—応答」でも以下のようにオウム返しが見られる例があったことを明記しておきたい。このような例は、状況3では4件、状況4では5件しかなかったが、「認識—認識」と「挨拶—挨拶」でもその傾向があったことから、開始部では全体的にオウム返しが好む可能性があることも否めない。

【談話例8 状況3・親しくない友人同士】

J4: あ、あー。
 J3: え、えー<笑い>&,
 →J3: えー、こんな所で—会うなんて>{<}。
 J4: <えー、どうした?>{<}。
 →J4: ねー、会うなんて—<笑い>。

【談話例9 状況4・親しくない友人同士】

J10: あ&,
 J10: お疲れさまです。
 J9: おー。
 J10: あー、お疲れさま<です>{<}。
 J9: <こんな>{<}所—に、
 →J10: なんとー。
 →J9: なんと。

4. まとめと今後の課題

本研究では、偶然の出会いにおける開始部が「認識—認識」→「挨拶—挨拶」→「挨拶表現—応答」で構成されていることを提示し、アレ形感嘆詞の多用や挨拶の省略が多いことなど、出会いへの驚きの表示が偶然の出会いにみられる特徴を生んでいることについて言及した。また、3つの隣接ペアすべてで第一成分と第二成分のオウム返しがみられたことから、開始部全体でオウム返しが志向されている可能性があることも提起した。

相手との親疎による差異、性差については取り立てた結果を得ることはできなかったが、データ数を今後増やし、再度検証していきたい。

参考文献

- 長谷川頼子 (2001). 出会いの場面にみられるあいさつ語と実質的表現 筑波応用言語学研究, 8, 71-84.
 Hopper, R. (1992). *Telephone Conversation*, Indiana University Press.
 小林隆・澤村美幸 (2014). ものの言いかた西東, 岩波書店
 岡村佳奈 (2018). 日本語対面会話における開始部の構造と特徴—日常的に・久しぶり出会った場面 において— 社会言語科学会第41回大会発表論文集, 190-193.
 Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up Closings *Semiotica* 8, pp. 289-327.
 宇佐美まゆみ (2015). 基本的な文字化の原則(BTSJ: Basic Transcription System for Japanese)2015年改訂版 (<http://ninjal-usami lab. info/pdf/btsj/btsj2015. pdf>)
 羅聖淑 (2010). 「お疲れさまです」をめぐる一日韓大学生の挨拶言葉の対比より— 上野善道(監) 日本語研究の12章 明治書院 pp. 16-31.